

## 「2023年度タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学教育学部3年 吉田 祥世

チュラーロンコーン大学サマースクールに参加して、特に心に残り、これからの生き方に影響を与えるであろうと感じていることが3つある。

1つ目は、「タイ国紹介・タイ文化」という授業で、タイ人の価値観について学んだことである。タイ人の優先度は、家族、学校や職場に関わる人(友人や同僚)、知らない人の順に高い傾向があると教わった。そのため、例えば友人との約束事と家族との約束事が重なってしまった場合、後者を優先する人が多いという。実際チュラ大の学生に聞いてみても、同意する人が多かった。そして、これは、関係の遠い人ほど丁寧に接し、時に優先することを良しする日本の価値観とは逆であると学んだ。日本には「親しき仲にも礼儀あり」ということわざがあるが、タイの文化は、「親しき仲ほど礼儀あり」というように表されるのではないかと考えられる。「関係の強い(あるいは深い)人ほど、優先して大切にする」ということは、言われてみると、とても自然な考えであるように思われる。しかし、日本という国では、それとは反対とも言える価値観が一般的であるということに気がつき、驚いた。自分が包まれていた文化を相対的に見ることができたという、貴重な経験ができたと感じている。

2つ目は、仏教についてより深く知ることができたことである。バンコクでは、学生寮、家、ショッピングモールなどの傍らに、「土地を守る神様」の祠が設置されていることがほとんどであった。それらの祠が豪華で、お供え物が欠かされていない様子を見ると、タイの人々にとって宗教がどれほど身近で、大切なものであるかが少し分かったように感じた。“Thai Literature and Culture”という授業では、タイの文化や社会の根底には、仏教の教えがあるということ学んだ。「徳を積む」ということが非常に重要視されており、そのためにお供え物をしたり、寄附をしたり、良い行いをしたりするのだという。気になったのは、人々における容姿、健康、裕福さ、社会的地位の差は、前世の徳によって理解される傾向があるというお話である。この考え方は、「前世にあまり徳を積まなかったのなら仕方ない」と経済格差を容認することに繋がるのではないかと危機感を抱いた。タイの街を歩いて、ショッピングモールなどの豪華な建物がある一方で、その近くには綺麗とは言い難い家などが並んでいる様子から、ギャップを強く感じていたからである。仏教と現代社会が密接に関わっているタイでは、仏教の教えと社会問題はどのような関係にあるのか、仏教の教えが社会問題の解決に貢献しているのか、これからも探っていきたい。

3つ目は、自分にとって「わくわく」することを見つけ出す楽しさを知れたことである。ウィークエンドマーケットには所狭しと店が並んでおり、それぞれの店は個性豊かで、商品が綺麗に並べられているところもあれば、迫力満点に積み重ねられているところもあった。そこを気持ちの赴くままに歩き、心惹かれるものと出会うことは、まさに一期一会であった。これまで、買い物をするときは自分が求めているものを探すという意識が強かったが、「何か面白いものがあるかもしれない」と発見を楽しみにする気持ちを抱くようになった。それほど、タイにはわくわくする出会いが溢れていた。そして実際、わくわくするものに時々出会うことができていた。

最後に、共同発表でも話題に上がった、「文学部不要論」について気づいたことを述べたい。文学部不要論とは、文学が役に立つかどうかを疑問視する声である。また、外国語を学ぶことも、AIの翻訳技術が発達してきている今、その必要性を疑う声が存在している。しかし、私は今回のプログラムで、文学部での授業や、日本語学科の存在がとても「役に立った」と感じた。「役に立った」というよりも、タイの歴史や文化を学び、人と交流するために必要な存在であり、その体験こそが楽しかったし、とても感謝しているといった方が適切である。タイで様々な場所に訪れ、彼、彼女達との会話を通して文化をより深く知ることができたのは、チュラ大の学生方のおかげであると言っても過言ではないだろう。彼、彼女達が日本語を学んできたことは、彼、彼女達の力になっているのみならず、偶然に出会った私達日本人学生が充実した2週間を過ごすことを可能にしてくれた。この

&lt;事務局使用欄&gt; 受付番号:

-

ことから、「役に立つ」という言葉も「いつ、誰の、役に立つ」ののだろうかと思いを広げていくと、簡単に分かるものではないのだと気がついた。普段、私達はこの言葉を「すぐに、自分の、役に立つ」という限られた意味で捉えてしまう傾向があるのではないかと思われた。